

## [要旨]

### 清末の“小悪党”とフェミニズム ―吳趼人の小説の意義

松田郁子

清末の小説家吳趼人（1866－1910）は、中国における新聞雑誌出版事業草創期において最も早期に登場した専業作家の一人である。その作品量、影響力ともに同時代に突出していたといえる。しかし、中華人民共和国成立以後、その政治姿勢を理由に絶対否定され、研究もされず、作品も再版されなかった。二十世紀末に至り全集が出版され、個別作品の研究が再開されているが、未だ“愛国者であり、初期には進歩的側面もあったが、1907年以降は、「中国革命同盟会」の革命運動、立憲運動を批判し、反動に転じた。《写情小説》を創始し、鴛鴦蝴蝶派（中華民国以降の文壇で、低俗な風俗小説とされた）の始祖となり後世に悪影響を及ぼした”とする基本評価は変わっていない。

論者が吳趼人の作品中の特性と思われる女性及び悪党の形象を解析した結果、吳趼人が強い社会悪糾弾意識、女権意識を基軸に小説を執筆した作家であったことが明らかになった。またその過程で、吳趼人の事蹟や作品について、幾つかの新たな事実が発見された。また近年、中国においても文学史上の新事実が発掘された。現在、それらの新事実を基軸に、その作品の新解釈、再評価が可能となった。論者は本論において、吳趼人の小説の作品論を積み重ねることによる吳趼人像の再構築を試みた。

吳趼人は、金石学と救国に挺身した大官や名高い女傑画家を先人に戴く権門に生い立った。高い文人の素養に恵まれ、官界の実態を具に見聞する環境にあつて、国難に対峙する強い士大夫意識を育まれたと思われる。家門の没落と父の死により、十代から上海江南製造局に勤めて自活し、二十代から執筆活動に携り、雑誌編集者として政治運動、社会運動に挺身した。1903年より、官憲の弾圧による関係雑誌の停刊相次ぎ、小説家に転じた。彼の創作の原点は、列強諸国の侵略に対する抵抗意識の強い上層官人家庭に生い立ち、年少より都市貧困生活に陥って下層社会に触れ、編集者として種々の見聞を経ながら、愛国運動に参加し、言論弾圧に遭った原体験にある。草創期の出版報道業界にジャーナリストとして活動し、政府側の弾圧、各派政治改革論者の抗争、資本家や旧文人、旧官僚出身出版人との軋轢の渦中におかれた体験は、権力者に敵対する在野の作家という方向性を指向させたと思われる。彼は薄給労働者生活を体験して、庶民感覚と下層民への視点を培った。また、小説『胡宝玉』には、編集者生活の中で見聞した妓女たちの薄命や気甲斐性、独立自主の精神に受けた感銘が記されている。さらに、小説『新石頭記』には、愛国運動の中で出逢った実在女性薛錦琴への驚嘆の念が記されている。それらの出会いは、“社会の中の女性”、“救国と女性”という視点を得る契機であったと推察される。吳趼人は、愛国意識、女権意識の育まれる環境に生い立ち、実生活上の体験を経て政治社会、女性性への思索をより深めたのであろう。専業作家に転じると、時事、政治見識、女権意識、国家社会の疲弊を憂慮する思いを小説中に投影し、《社会小説》、《写情小説》を創始した。

論者は、吳趼人作品の方向性を定めたのは、翻案小説「電術奇談」であったと考えている。吳趼人が小説家に転じて間もなく翻案を手掛けた英国小説の日本語訳の中国語重訳翻案小説「電術奇談」は、中華民国成立以降、ほとんど論じられることはなかった。しかしこの小説には、多くの点で吳趼人と中国小説への影響が認められる。「電術奇談」ヒロインである高貴のインド人女性性は、帰国する英国人の恋人を追って家出し、船中で結婚を迫り、異国で舞踊家として自立する。彼女の恋愛行動は吳趼人に、“恋に自我を発現させ自立を求める”という女性の可能性を知らしめたのではないかと推察される。吳趼人は実在と創作上の双方の女性像から、恋の芽生えにより生じる女性の自己実現欲求と、その社会改革、救国との連動という視点を得て、《写情小説》を創作したと考えられる。彼は《写情小説》「劫余灰」執筆にあたって、“世界は絡繰り人形の舞台であり、人形を動かす‘傀儡の糸’の正体は人の本性たる‘情’である”と言う趣旨の世界観を表している。

また吳趼人は、《社会小説》を創始し、清末における国家の衰勢、政治の腐敗、社会の混迷を映した作品を描いた。彼は翻訳小説「電術奇談」に登場する悪役に着眼し、“絡繰り人形（‘傀儡’）の糸を操る者（‘動總線索者’）”と特記している。《社会小説》に描いた人心操縦者の破壊行為と、《写情小説》に描いた女性性の発現は、彼の世界観に鑑みれば同源の事態であったといえる。また、「電術奇談」に登場する“求愛し自立する女性”、“妻や恋人に献身する男性”、“理解ある家長”像は吳趼人の《写情小説》のみならず、その後の中国恋愛小説に頻出する人物像となった。「電術奇談」は、吳趼人の世界観に《写情小説》、《社会小説》という構想を提示し、さらに以降の中国小説の方向性を導く契機となった作品であったといえよう。本論では、彼の創始した《社会小説》、《写情小説》領域に属する作品を、上記の点に照準をあてて検討し、その中国小説史上の位置について考察を進めた。

《写情小説》執筆にあたり、吳趼人は先ず『恨海』、『劫余灰』を描いて中国における女性の恋と自己発現、自立の可能性を模索した。『恨海』では纏足で読み書きのできる富商の令嬢を、『劫余灰』では天足（纏足しない足）で学識優れた才媛を題材とし、天足と女子教育の効用を訴えた。しかし女性の恋の萌芽と自我の発現は描き得たが、女性に課される嫌疑（男女関係を疑われないよう異性を避ける）や守節（婚約者、配偶者の死後に位牌を守って再婚しない）等、礼教の枷を取り除くことはできなかった。個別感覚においても社会通念においても、男女とも生存中は自由に愛情表明ができず、女性の愛は守節するほかに全うする術がないという時代制約は免れなかったであろう。次に吳趼人は、前時代の作家宣鼎の短編伝奇小説「秦二官」の粗筋、人物を借りて恋愛心理の描写を加筆し「情変」を描いた。儒教的拘束の弱い農村の武俠の娘を題材としたことで、ようやく女性の行動、倫理面における枷が緩んだ。「情変」ヒロインは、「電術奇談」ヒロインと同様に天足の行動派で、自ら男性に求愛し結婚を迫る“求愛自立型女性”である。

吳趼人の《写情小説》の特性は女性心理の綿密な描写にある。その旧小説に見られない手法は臨場感と現実感を伴い、親族以外の異性と同座した経験のない当時の読者が、異性の存在や自身との関わりを意識し、自己意識に目覚める契機となり得たと思われる。吳趼人の《写情小説》は、

社会的存在としての女性の恋情に目を向け、愛の自覚と自立さらには救国への助勢を希求した、当時において破格の先進的発想によって描かれていたといえよう。

また吳趼人の《社会小説》は、救国と政治改革、社会改革を求める時代精神を色濃く投影し、種々の社会悪を糾弾する姿勢を前面に打ち出している。《社会小説》に描かれた噂話の情報屋、買官買職、色仕掛け、強盗、詐欺といった悪事の多くは、歴史人物や犯罪組織の構成員ではなく、貧民や下層民、職にあぶれた小役人、拝金主義、出世主義の俗物といった小悪党を担い手とする。また、不穏な社会状況下に人の期待や不安を操り、奇計を弄して利益誘導する悪党が多く登場する。官界関連の悪事は、伝統的官界遊泳に下層民が参入するという清末の社会構造の変化を映している。外国関連の悪事は、売猪仔（中国人を拉致して外国に売る）、敵軍への情報提供といった社会体制、国家体制を揺るがすほどの破壊行為を成す点において、清末の特質を反映している。本論においては、そのような人心誘導、破壊工作を特質とする悪事を、吳趼人の着眼と命名に随い‘傀儡’師という視点から考察した。

《社会小説》『新石頭記』と「上海遊驂録」は構想、構成ともに優れ、作者の思索と感懷を開示した重要な作品でありながら、民国成立後は顧みられず、中華人民共和国においては全面否定され、近年まで入手さへ困難な状況にあった。前者は‘孔子の思想’称揚、後者は‘革命党’の誹謗中傷が批判理由で、“1907年以降思想的に反動化”したという評定の根拠とされてきた。論者は、作品読解と分析を試みる過程で、二作品の作中における記述が吳趼人の実体験に基づいていることを知り、再考の必要性を確信した。

『新石頭記』に描かれた文明の利器、未知の動植物にはすべて典拠が確認された。特にジュール・ヴェルヌ作品が素材とされている点は注目される。吳趼人はその執筆を通じて、当時盛んに議論されていた‘文明’についての探求を意図していたと思われる。作者の分身とされている『新石頭記』老少年や「上海遊驂録」李若愚の言葉を通じて、吳趼人は独自の‘文明’論、‘道德’論を提唱し、理想世界像を構想している。彼は、弱小国を抑圧する列強のもたらした近代文明を‘偽文明’、“‘堯舜以前’の古代人とその営為に成る創造性に富む古代中国文明”を‘真文明’と規定した。さらに、‘孔子の教え’を古代文明の真髓と位置づけ、社会が荒廃した要因を君臣関係のみ偏重した‘宋儒の毒’に帰した。吳趼人の真意は、古代‘真’文明である‘孔子の教え’により、朱子学の広めた礼教支配の弊害を払拭しようとする、封建支配体制の克服にあったと思われる。

“墮落した革命党”を描写してとりわけ批判の対象とされた「上海遊驂録」の記述も、中傷ではなく、実体験の記述であったことが分かった。吳趼人は実際に‘革命派’、‘立憲派’人物との交誼が深かった。胡適は、遊蕩仲間と交わっていた少年時代に、吳趼人と面談したとの記述を日記に残している。その証言は、「上海遊驂録」における‘革命党’批判、‘立憲’反対が、実体験に基づいて得た危惧であったことを明らかにした。

従来、‘旧道德恢復’という主張は吳趼人の‘思想的退行’、‘反動’化として批判の対象となってきた。しかしそこには、宋学の弊害を一掃し、拝金主義の蔓延する社会悪の‘根源をただす’方策を模索しようとする吳趼人の思索が表れている。吳趼人は、宋学の君臣理念に支えられる封

建支配体制を否定し、通称‘孔子思想’を指導マニュアルとする古代農耕共同体社会の民衆主導体制を提案している。辛亥革命後、復古政治を唱える声は高かったが、管見によれば、周王朝より以前を理想とする案はほかに例を見ないと思われる。吳趼人の提唱した“王朝以前の古代人の民衆政治”は革新性に富む発想であったといえよう。これまで中国近代文学史上において下されてきた、吳趼人の思想性についての否定的評定は、そのような思索についての厳密な検討を経たうえで再考されるべきであろう。

吳趼人は、《社会小説》、《写情小説》という新たな領域を創始して、時代の状況と思念を作品上に反映させた。中でも、民族国家を危機に陥れる小悪党の所業を描き出し、女性の心身行動の解放を模索した。小悪党と女性を主要な執筆対象として選択したのは、両者を解決すべき清末社会の病弊の根源と捉えていたことを示している。また西洋小説に詳しく構成力に長じ、旧小説の常套を脱した作品を描いた。それらの点において彼の小説は、斬新で創造性に富み、従来の中国小説にない独自性を備えている。中華民国成立以後に下された“旧小説の残骸”という文学史の見解を改め、近代文学の草創と位置づけるべき成果を残したことを、最評価しなくてはならないと考える。